

中学国語教材 第1学年 Ⅱ 『詩って何？ 俳句って？』

学習・第1回 韻文いんぶんに慣れる ①

◆今日の学習のポイント◆

私たちがふだん接している文章に注意してみましょう。私たちがふだん接している文章は、形式の違いで種類を分けることが出来ます。

次にあげたBの作品（詩）には、調子の良い一定のリズムがあります。これに対し、Aの作品には、このようなリズムはありません。文学作品は、「リズムを持った形式」の文章とそうではない文章に分けることが出来ます。リズムのないAのような小説や随筆などを『散文(さんぶん)』といいます。これに対し、Bのような「リズムを持った形式」の文章のことを『韻文』と呼びます。「短歌」や「俳句」なども韻文です。

◇基礎トレーニング◇

◎ 左のAとBの作品を、声に出して読み、その違いを感じてみましょう。

A 吾輩は猫である。名前はまだ無い^な。

どこで生まれたかほとんど見当がつかぬ^{けんとう}。何でも薄暗いじめじめしたところでニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。我輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であった^{どうあく}そうだ。

【夏目漱石「吾輩は猫である」

より】

B 朝焼け小焼けだ

ようだけど

大漁だ

海のなかでは

大羽鯉（いわし）の

何万の

大漁だ。

鯉のとむらい

浜は祭りの

するだろう

【金子みすず 大漁】

Ⅱ 『詩って何？俳句って？』 学習・第一回 韻文に慣れる ②

◇ 補充トレーニング ◇

(1) 左のAとBの作品は、どちらが【散文】で、どちらが【韻文】ですか。

A 何でも大きな船に乗っている。

この船が毎日毎夜すこしの絶間なく黒い煙を吐いて浪を切って進んでいく。
すさま けぶり なみ
凄じい音である。けれども何処へ行くんだか分らない。只波の底から焼火箸
どこ わか ただ やけひばし
の様な太陽が出る。それが高い帆柱の真上まで来てしばらく挂っているかと
ほほしら かが
思うと、何時の間にか大きな船を追い越して、先へ行ってしまう。そうして、
いつ
しまいには焼火箸の様にじゅつといつて又波の底に沈んで行く。その度に
やけひばし たんび
蒼い波が遠くの向こうで、蘇芳の色に沸き返る。すると船は凄じい音を立て
あお すおう
てその後を追掛けて行く。けれども決して追附かない。
おっか おっつ

【夢十夜(第七話)より】

B 燈火(ともしび) ちかく衣縫う(きぬぬう) 母は

春の遊(あそび)の楽しさ語る

居並ぶ(いならぶ)子どもは指を折りつつ

日数(ひかず)かぞえて喜び勇む(いさむ)

囲炉裏火(いろりび)はとろとろ

外は吹雪(ふぶき)

【小学校唱歌 冬の夜】

(2) 右の文章Bの特徴として気づいたことを箇条書きに書いてみましょう。

Ⅱ 『詩って何？俳句って？』 学習・第1回 韻文に慣れる ③

◇ 向上トレーニング ◇

(1) つぎの作品を繰り返して声に出して読み、リズムを味わってみましょう。

たれか^{たかどの}しるらん花ちかき
高楼^{たかどの}われはのぼりゆき
みだれて^{あつ}熱きくるしみを
うつしい^{しひつかん}でけり白壁に

唾^{つば}にしるせし文字なれば
ひとしれずこそ乾きけれ
あゝあゝ^{しろ}白^{しひつかん}壁に
わがうれひありなみだあり 【白壁】

鯨法会^{くじり}ははるのくれ
海にとびうおとれるころ。

おきでくじらの子がひとり
その鳴るかねをききながら、

浜のお寺^{みのも}が鳴るかねが、
ゆれて^{みのも}水面をわたるとき、

死んだ父さま、母さまを、
こいし、こいしとないてます。

村のりょうしがはおり着て、
はまのお寺へいそぐとき、

海のおもてを、かねの音は、
海のどこまで、ひびくやら。 【鯨法会】

おうい雲よ
ゆうゆうと

どこまでゆくんだ
ずつと岩城^{いわきたいら}平の方までゆくんか 【雲】

(2) 右の二作品のうち、韻文に慣れる①の【大漁】と同じ作者の作品はどれでしょう。

あなたが、そのように感じた理由を簡単な箇条書きにしてみましよう。